

[連載]第22回 **清々しき人々** 月尾嘉男 (東京大学名誉教授・工学博士)

不屈の精神で最悪の探検から生還した E・シャクルトン



E.H.シャクルトン (1874-1922)

未知の南方大陸の探求

一三八五年にポルトガルにアヴィス王朝が誕生しますが、初代国王の三男D・エンリケは世間で航海王子として有名です。それはポルトガルを海洋王国にするため多大の貢献をしたからです。一四一六年に航海について研究と教育をする「王子の集落」を建設し、情報収集や技術開発をします。その成果により一五世紀前半からポルトガルの船隊はアフリカ大陸南端を周回するインド航路を開拓するなど一気に海洋王国として発展していきます。

一方、スペイン王室の資金援助により、一四九二年にC・コロンブスが北米大陸の一部に到着したことに、世界規模の領土問題が発生します。そこで教皇アレクサンデル六世が大西洋のほぼ中央の子午線を境界に、それぞれ西側で発見された陸地はスペインの領土、東側はポルトガルの領土とするトルデシリャス条約を一四九三年に布告しますが、現在でこそポルトガルは小国ですが、約五〇〇年前にはスペインと世界を二分する大國だったのです。

それ以後も、一六世紀前半にはスペイン王室の支援によるF・マゼラン指揮の艦隊の世界一周航海、後半にはイギリスのF・ドレーク艦隊による世界一周航海、さらに一七世紀になってオランダのW・ヤンツによるオーストラリア大陸の発見、やはりオランダのタスマンによるニュージーランドの発見、一八世紀になってイギリスのF・クックによる南極海域の探査などが相次ぎますが、その結果、ある重大な疑念が議論されるようになります。

それらの発見を総合して地球の陸地面積を合計すると、赤道以北の半球は陸地が四割であるのに以南には二割しか存在しないため、地球の自転が安定せず、南側に未知の大陸があると推測されるようになります。これは「テラ・アウストラリス・インコグニタ(未知の南方大陸)」と名付けられ、各国が発見競争をしますが成功しませんでした。一八二〇年に何人が未知の大陸に上陸したと主張しますが、現在でも最初の発見は不明のままです。

しかし南極大陸が発見された結果、目標は極点への到達競争に移行します。二〇世紀初頭から国家の威信を背景にイギリスなど各国が探検を開始し、日本も一九一一年に白瀬勲が南緯八〇度〇五分まで到達しています。しかし本当に国家を背負って競争したのはノルウェーのR・アムンセンとイギリスのR・スコットが指揮する二隊で、結果はアムンセンが一九一二年に先着、スコットが後着、しかも五名は帰路で全員が死亡という悲劇で終了しました。

シャクルトン最初の南極探検

これで未踏の極点への到達競争は終了し、以後は南極大陸を横断する競争の開始になります。この競争に挑戦し、失敗を偉大な成功に転換した人物アーネスト・ヘンリー・シャクルトンに今回は紹介します。シャクルトンは一八七四年にアイルランドで一〇人の兄弟姉妹の長男として誕生しました。六歳



図1 ディスカバリー号



図2 ニムロド号



図3 探検の経路



図4 身動きできないエンデュランス号

のときに一家がロンドン郊外に移住し、そこで勉強しますが、成績は優秀であつたものの勉強に心がなく、一六歳のときに船乗りになつてしまいます。この分野では適性を発揮し、何隻もの商船で船員としての経験を書き積り、船乗りとしての階級も上昇、二四歳になつた一八九八年にイギリスのサウサンプトンとアフリカ南端のケープタウンの区間を定期運行するユニオン・キヤッスル・ラインに船員として就職します。しかし、一九〇一年に人生後半の方向を決定する仕事に従事することになりました。王立地理学会が企画した南極を調査する目的の遠征の隊員に採用されたのです。

正式には「イギリス国立南極探検」、一般には「ディスカバリー遠征」と名付けられた探検は、木造の三本帆柱の機帆船「ディスカバリー」(図1)を新造し、隊長には後年、極点に到達したものの帰路に死亡した海軍中佐R・F・スコットが任命されました。この探検は一九〇一年八月にイギリスを出発、翌年一月に南緯八二度七分の極点まで約九〇〇キロメートルの地点に到達する記録を達成し、本隊は〇四年九月に本国に帰還しました。

シャクルトンは上記の最南端到達新記録の探検に参加したものの、隊長のスコットとの関係が悪化しうへ体調にも衰弱状態になつたため、補給のために到着した船舶「モーニング」に乗船させられ、ニュージーランド、サンフ

ランシスコ、ニューヨークを経由して〇三年に帰国しました。探検から最初に帰国した重要人物としてロンドンでは有名になりますが、途中で返還されたという汚名を返上するため新規の探検を企画します。

シャクルトン第二の南極探検

そこでシャクルトンは王立地理学会の会報「ジオグラフィックジャーナル」に南極遠征計画を発表し、寄付金集めに奔走します。しかし十分な資金を獲得できなかったため、アザラシを狩猟する目的で建造された約四〇年が経過していた三三四トンという、「ディスカバリー」の半程度程度の老朽木造船「ニムロド」(図2)を購入し、一九〇七年八月にイギリスを出航、翌年元日に中継場所のニュージーランドから南極に出航しました。

約一ヶ月で南極に接近して上陸地点を探索し、二月三日にケープ・ロイックに拠点となる小屋を建造します。そこでシャクルトンは以下四名の隊員が二八〇〇キロメートル彼方の極点を目指して出発しました。荷物の運搬に使用した四頭のポニーが途中ですべて死亡したため、隊員がソリを牽引しながら進行し、翌年一月九日に極点まで約一八〇〇キロメートルの南緯八八度三分に到達し、国旗を掲揚しました。帰路は往路以上に過酷な移動となりました。予定以上の日数がかつたため、一日あたりの食料を削減していましたが、往路で死亡したポニーの腐肉を食料にしたため全員が腸炎になりました。なんとか基地に到達し、全員が出発の「ニムロド」に乗船し、出発から二年が経過した一九〇九年三月二日にニュージーランドに到着し、ロンドンに長文の電報で探検の報告を送信し、六月一日に帰国したときには多数の群衆に歓迎されました。

第三の南極探検の準備

この帰国から二年が経過し、前述のようにアムンセンが極点への到達に成功したため、シャクルトンは目標を南極大陸横断に変更、一九一四年に「帝国南極大陸横断遠征」計画を公表します。二隻の船舶を用意し、一隻は横断する本隊をウェッデル海側に輸送し、もう一隻は支援する部隊を反対のマクマード湾側に輸送するという壮大な計画でした。その資金は政府の出資以外に民間の寄付を公募し、何人も金持ちが多額の寄付をしました。

隊員は公募し、新聞に「至難の探検に男子募集。些少な報酬、極寒、暗黒の日々、危険の連続、生還の保証なし、成功の場合は名譽と賞賛。アーネスト・シャクルトン」という広告の操作とされる文章を掲載しました。その結果、約五〇〇〇名の応募があり、シャクルトンが風変わりな独自の審査によって五六名を選抜し、船乗り世界の伝統の階級制度を撤廃、全員が雑用も分担す



図5 沈没寸前のエンデューアランス号

と二隻の船に半分ずつ乗船させることにしました。

使用された二隻のうち、歴史に名前が記録される「エンデューアランス(忍耐)」(図4)は当初、北極海域での観光や狩猟のための豪華客船として建造された全長四四メートル、三四八トンの三本帆柱の木造船で、三五〇馬力の蒸気機関を搭載していました。しかし発注した船主が支払なくなったためシャクルトンが買取り、南極探検目的に改造したものです。船名の「忍耐」はシャクルトン一族の家訓「忍耐による克服」から名付けたものです。

シャクルトン第三の南極探検

一九一四年八月の出航予定でしたが、三日に第一次世界大戦が勃発したため出発を見合わせようとしたところ、海軍大臣W・チャーチルから出発するようとの命令があり、九日にプリマスを出航しました。プエノスアイレスとサウスジョージア島を経由して翌年一月にはウェッパル海域に到達しました(図3)が、分厚い流氷に阻止されて身動きできなくなりました(図4)。そこで二月になってシャクルトンは船内で越冬することを決定します。

当初は海流によって流氷が移動して解放される期待もありましたが、その気配はなく両側から船体が圧迫されはじめます。エンデューアランスは極地探検のために建造された頑丈な船体でしたが、一〇月になって船体が崩壊しはじめたため、二七日に放棄することにします。そして一月二日にエンデューアランスは海底に沈没していきましました(図5)。そこで必要な荷物をイヌワリで運搬する体制で全員が徒歩で流氷



図6 エレファント島から出発する救命ボート

を走破し陸地を目指します。移動の負担軽減のため船内の食料の持出しを制限したため不足気味となり、アザラシやペンギンを主食とし、最後はイヌまで食料にし、燃料もアザラシの脂肪を使用する状態でした。しかし流氷が徒歩には危険な状態になってきたため全員が氷上でテント生活をできるように方針を変更しますが、その流氷が分断されてしまいます。そこで最後の手段として運搬してきた救命ボートに全員が分乗して南極半島先端のエレファント島に到達しました。

ここから最短距離にある人間が存在する場所は一五〇キロメートル彼方のサウスジョージア島の捕鯨基地ですが、シャクルトンは選抜した五人の隊員とともに全長七メートルの救命ボートで救援依頼に出発します(図6)。途中は世界有数の強風地帯で何度も沈没の危機を直しながらも一日後に到着しました。しかし捕鯨基地は裏側にあり、シャクルトン以下三名は十分な装備もないまま三六時間かけて雪山を横断し基地に到達しました。

しかし、孤島に孤立した二名の隊員の救出は難航します。まず三日後に一隻の船で救援に出発しますが、周囲に流氷が密集し接近できません。さらに追加の二回も接近できず、チリ海軍の小型タグボートを借用し、シャクルトンがエレファント島を出発してから四ヶ月後ようやく全員の救出に成功しました。帰還したヨーロッパは第一次世界大戦中であつたため、シャクル

トンは陸軍に志願しますが、戦線には配属されませんでした。しかし大戦が終了し、シャクルトンは冒険精神を再度発揮し、捕鯨船を購入して南極を目指し、一九二二年一月四日にサウスジョージア島に到着しました。しかし翌日、心臓発作に見舞われ四八年の人生を終ります。遺族の指示で遺体は島内に埋葬されましたが、ロンドンでは葬儀が執行了れませんでした。イギリスでも南極で死亡したスコットが悲劇の英雄として人気がありますが、シャクルトンの指揮能力は現在でも賞賛の対象となっています。

つぎお よしお

1942年生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータグラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースキーをしながら、知床半島、羊蹄山、釧路、道庁、白馬山、富川清流、瀬戸内海などを主筆し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本 百年の転換地誌』(講談社)、『小文明の展望』(東京大学出版会)、『地球の生』(講談社)、『地球の救い方』(水谷の語)、『先行』(100年先を読む)、『マロロジ』(研究社)、『先住民族の救済』(研究社)、『誰も言わなかった本』(当は忍びいびく)、『サイバー戦争のカラクリ』(テスコム)、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』(致知出版社)、『審判官社会への転換』(マロロジ)、『研究』(研究社)、『転換日本地誌』(研究社)。(東京大学出版会)。



◆参考・A・ランシング「エンデューアランス号漂流」(新潮社)一九九八
M・モレル/S・キャバレル「史上最強のリーダー・シャクルトン」(PHP研究所)二〇〇一

ざぶん賞

2018(第17回)小中学生の作文募集

人が生きるためにもっとも重要な物質は空気、そして水です。その空気や水が今、私たちに様々な問題を投げかけています。小中学生の皆さんが、水について文章を書くことで、水の現在や未来、そして命の大切さを考えてほしいと思います。

応募のしかた

- 資格：小・中学生 ●文章：未発表作品 ●字数：1,200字以内
- 用紙：ざぶん賞応募用紙(ホームページからダウンロード)、A4用紙等、または電子データ。
- 形式：タテ書き 濃い鉛筆、またはボールペンで書いてください。
- 記入事項：題名/名前(ふりがな)/都道府県名/学校名/学年/性別/連絡先住所/連絡先電話番号(連絡先が学校の場合はご担当の先生のお名前)
- 送付方法：郵送の場合 〒924-0053 石川県白山市水澄町429番1 [送付先はこちら](#)
- ざぶん賞実行委員会事務局まで 電子メールの場合 info@zabun.jp
- 締切：2018年9月6日(木)必着

全員に「ざぶん大使認定証」をお贈りします。文章選考委員長は作家の安部龍太郎氏です。入選作品は、画家、イラストレーター、工芸作家がアート作品に仕上げ、贈呈します。選考結果は2018年10月に発表。全国表彰式を2018年12月に金沢市で、地区表彰式を12月以降に各地区で開催予定です。

●文章作成や応募の際に発生する経費は負担しません。●応募書類は返却しません。●応募書類の不慮の破損や紛失の責任は負いません。●入選者以外への選考結果の告知はいたしません。●入選作品の出版権、および著作権は主催者に譲ります。●募集内容や選考要項など一部変更することがあります。主催：ざぶん賞実行委員会(委員長 月尾嘉男) 問い合わせ先：事務局 電話 076-287-6782



<http://www.zabun.jp/>